

# 2010年度 東京大学 前期 世界史B

## 第1問

### 【近現代に比重を置いた解答案】

スペイン=ハプスブルク家のカルヴァン派弾圧に対し、オラニエ公に率いられて北部7州がネーデルラント連邦共和国の独立を宣言し、ウェストファリア条約で認められた。東インド会社を設立してアジア貿易に乗り出し、グロティウスは『海洋自由論』でスペインの海上支配を批判した。17世紀前半には中継貿易で全盛を極めた。しかし英の航海法発布を機に始まる英蘭戦争で敗北。蘭領ニューアムステルダムは、英領ニューヨークとなった。アジアでは、ポルトガルに代わって香辛料貿易を独占し、アンボyna事件で英を排除、ジャワ島のバタヴィアを拠点に東インド植民地を建設。台湾のゼーランディア城、日本の長崎にも貿易拠点を置いた。19世紀、ナポレオン戦争を経てケープ、セイロン、マラッカなどを英に奪われ、ジャワではコーヒーなど強制裁培制度を導入した。ケープでは、英の支配を嫌うオランダ系の入植者がトランスヴァール共和国などを建国するが、ダイヤモンド利権をめぐる英との南アフリカ戦争に敗れ併合された。20世紀、東インドではサレカット=イスラームなどの民族運動が高揚し、太平洋戦争中の日本軍の占領を経てインドネシアが独立した。第二次世界大戦で本国が戦場となり、最大の植民地を失ったオランダは、欧州統合に活路を求めた。仏・西独・伊・ベネルクス3国で欧州石炭鉄鋼共同体を結成。これが欧州共同体に発展し、冷戦終結後のマーストリヒト条約で欧州連合が発足した。

(598字)

### 【前近代に比重を置いた解答案】

15世紀後半にハプスブルク家領となったネーデルラントでは中世以来、商工業が発展、宗教改革後、カルヴァン派が拡大した。フェリペ2世の旧教強制などの抑圧に対しオラニエ公を中心に北部7州がネーデルラント連邦共和国として独立した。17世紀には世界初の株式会社・蘭東インド会社がポルトガルや英を排しバタヴィア、台湾などを拠点に鎖国中の長崎で得た日本銀で中国物産も獲得するなどアジアとの中継貿易を独占、首都アムステルダムは欧州経済の中心となった。蘭独立を国際的に承認したのは三十年戦争後のウェストファリア条約であるが、この戦争中グロティウスは『戦争と平和の法』で国際法の確立を提唱した。新大陸には蘭領ネーデルラントを築いたが、英蘭戦争で喪失し英領ニューヨークとされ、続く英仏との抗争で海上覇権も失った。ナポレオン戦争中に東インド会社は解散、戦後、蘭系ブール人の入植したケープ植民地は英領となった。ブール人の移住地は南アフリカ戦争後に英領南アフリカ連邦に併合されたが、彼らの懐柔のため人種隔離政策が開始された。一方、ジャワではベルギー独立による経済破綻を背景にコーヒーなど商品作物の強制裁培で農民を困窮させた。20世紀初めまでに島嶼部を征服して蘭領東インドを形成したが、太平洋戦争中、スカルノは日本と提携、戦後インドネシアとして独立した。冷戦期の蘭は欧州統合に参画し、同国で調印されたマーストリヒト条約でEUが成立した。

(600字)

**第2問** 字数は問題記号(1)(a)を2字，(b)などを1字として含む。

(1)(a)董仲舒が法家に代わる皇帝の統治理論として儒学の官学化を武帝に建議。『春秋』などを五経として定め，五経博士が置かれた。(60字)

(b)魏晋南北朝以来の貴族的で形式化した四六駢儷体を批判した韓愈や柳宗元らは，儒学の復興と漢代以前の簡潔な古文復興を唱えた。(60字)

(2)(a)太宗は銅活字を鑄造し，朱子学に関する出版を奨励。世宗は朝鮮語を表す音標文字として訓民正音を制定，これは庶民に普及。(59字)

(b)マテオ=リッチと共に『幾何原本』を漢訳，アダム=シャルと『崇禎曆書』を作成，『農政全書』を編纂し西洋農法を紹介した。(60字)

(3)(a)18世紀以降，トルコ支配や神秘主義に反発しアラブ復興とムハンマドへの復古を唱えた。豪族サウード家と結び2次に渡り王国を建て，20世紀にはイブン=サウードがサウジアラビア王国を樹立。(90字)

(b)サティー(寡婦殉死)

(c)アロー戦争後，漢人官僚を中心に「中体西用」を掲げて儒教的皇帝専制を維持，西洋の軍事・産業技術を導入して富国強兵を図った。政治改革は避けられ，西洋近代技術の表面的な模倣に留まった。(90字)

**第3問**

(1) (人物) マキアヴェリ(マキアヴェッリ) (作品) 『君主論』

(2) (『ペルシア戦争史』)ヘロドトス (『ペロポネソス戦争史』)トゥキディデス

(3) (前2世紀) ポリビオス (建国以来の歴史) リウィウス  
許容解(ポリュビオス) (リヴィウス)

(4) (『教会史』) エウセビオス (『神の国』) アウグスティヌス

(5) (現在の国名) トルコ共和国 (匈奴の君主) 冒頓单于

(6) イブン=ハルドゥーン

(7) 『集史』

(8) シュペングラー

(9) (世界革命論)トロツキー (ロシア革命を批判・宥和政策に反対) チャーチル

(10) ネルー